

「岡崎発の『蝶々』～学校唱歌の源流をめぐって～」

岡崎女子短期大学  
准教授 上田信道



はじめまして、上田信道でございます。わたしは児童文学や児童文化を専門にしております。本日は歌のお話をいたしますが、わたしは音楽家でも声楽家でもありませんから、音楽的に考察したり歌ったりすることはできません。主に歌詞について、いま考えていることをお話したいと思います。

1. 唱歌「蝶々」

本日の演題は「岡崎発の『蝶々』～学校唱歌の源流をめぐって～」です。実は「学校唱歌」という言葉は、あまり筋の良くない言葉なんですね。なぜかというと、唱歌というものは学校で教える歌のことです。従って「学校唱歌」というのは「武士の侍」というようなものです。けれども、唱歌と童謡はよく混同されます。童謡は主として課外で歌われました。ちょっと前ですけども、某テレビ番組で童謡「蝶々」とアナウンスがあって、その度にわたしはかなり違和感を覚えました。そこで、唱歌「蝶々」なんだということをはっきりさせる為に、あえて「武士の侍」式にさせて頂いた次第です。

さて、唱歌「蝶々」の歌詞についてです。これはもう皆さんご存じだと思いますが、お手もとお配りしています、本日の資料をご覧ください。資料の歌詞は岩波文庫に載っているもので、形は変えてありますけれども、内容はそのままにしています。

少し年配のかたならそうでもないかもしれませんが、お若い方は「あれ？ 2番がある」と驚かれるかもしれません。でも、この唱歌の歌詞にはいろんなバリエーションあります。4番まであったりもするんです。そのなかで、本日は1番についてだけ、ということでお話をします。

それでは、とにかく歌のほうですね。まず、聴いてみましょう。恐れ入りますが、最初の曲をお願いします。

(音楽流れる)

ちょうちょう ちょうちょう。

菜の葉にとまれ。

なのはにあいたら、桜にとまれ。

さくらの花の、花から花へ。

とまれよ あそべ、あそべよ とまれ。

はい、ありがとうございました。

「あれ？ 違う」とお思いでしょうか？ ええ、そうなんです。お手もとの資料と、いまの歌詞とでは違うんです。いまはお聴きになったように「さくらの花の、花から花

へ」と歌いますが、むかしはこの部分を「さくらの花の、さかゆる御代に」と歌いました。つまり、「文明開化の明治の御世に、天皇陛下の御統治の下にいや栄えるこの御代に」という意味の唱歌になっているわけです。

それから、岩波文庫の注には「この原曲はスペインの民謡で、アメリカの唱歌集にも古くから載せられてあった」とあります。このように、もとは《スペイン民謡だ》とされている文献が多く、よく《アメリカの唱歌集経由で日本に入ってきた》といわれます。ところが、本の種類によっては《ドイツ民謡だ》と書いてあるものもある。混乱しているのです。

この問題については、安田寛さんというかたが研究なさっていて、一番手に入りやすい本は文春新書の『「唱歌」という奇跡 十二の物語』です。安田さんは音楽の専門家で、非常に詳しくお調べになっています。まず、《スペイン民謡だ》といったのは、日本最初の唱歌集『小学唱歌集』を編んだ伊沢修二なのだそうです。伊沢が「この歌の曲はスペイン民謡です」というようなことをいっているわけなんですね。これがスペイン民謡説の根拠です。ところが、いくら調べてもですね、もともなかったはずのスペイン民謡が出てこないんです。そこで安田さんは《ドイツの歌だった》という結論をお導き出しになりました。お手もとの資料に、もともなかったドイツの歌の楽譜を載せてあります。これ1番だけなんですけれども、タイトルを日本語でいうと「五月の歌」で、歌詞の意味は「五月は非常にさわやかだ」というようなことです。

というわけで、唱歌「蝶々」の原曲はドイツの歌です。これがですね、ドイツで歌い継がれていくうちに、全然違う歌詞で歌われるようになりました。その歌が日本語でいうと「小さなハンス」で、ドイツではかなりポピュラーな子どもの歌なのだそうです。ハンスが村を出て、また帰ってくる。そういうストーリーの物語歌なんですけど、これがドイツの音楽の教科書に載りました。

それでは、このドイツの歌が、どのような運命をたどって日本に入ってきたのでしょうか。

## 2. 「蝶々」ができるまで

唱歌「蝶々」をめくっては、いろいろな人物が出てきます。お配りしている資料にまとめて書いておきましたが、本日は3名についてお話をします。

ひとり伊沢修二です。この人は、日本人で最初に西洋音楽を勉強しました。障害児教育などもやった人なんです。信州高遠の生まれですが、愛知県と関係の深い人です。ここから、いよいよ岡崎学に関係する話になってくるわけですが、愛知県師範学校 — いまの愛知教育大の校長になりました。20代で師範学校長です。そんな時代なんですね。西洋の学問をきちっと修めた人がほとんどいませんでしたから…。

それから次の人。上下関係でいうと伊沢の部下に当たる人ですけれども、野村秋足(あきたり)という国学者がいます。資料を見て頂きますとわかるように、伊沢より遥かに年長の人です。学者としてのキャリアも長く、本居宣長の孫弟子に当たります。そういう人が20代の若い校長の風下に立ちます。まあ、それが時代というものです。この人は名古屋出身ですから、愛知の師範学校の教員をしていたというわけですね。

もうひとり、今度は外国人が出てきます。メーソンというアメリカ人です。明治の初めごろには、お雇い外国人といって、明治政府が高給で招聘した外国人たちがいました。お雇い外国人の指導の下に、明治国家は近代的な産業技術や西洋文化の摂取の基礎を築いていきます。メーソンもお雇い外国人のひとりで、日本の洋楽や音楽教育の基礎を作りました。そして、実はこの人が伊沢修二の音楽の先生だったんですね。

資料の経歴を見て頂くとわかりますが、メーソンはオハイオ州シンシナティで音楽教育家として名をあげました。この地域はドイツからの移民が多かったのです。ドイツ系の子どもたちは、家ではドイツ語を話しています。そういう子どもたちに音楽を教えなければいけない。どうしたら良いか…。考えついた方法が《ドイツの歌を英語の歌詞で教える》ということです。こういう経過をたどって、ドイツで歌われていた「五月の歌」も英語の歌になりました。もっとも、英語の歌詞では、まるで内容が変わってポト漕ぎの歌になっているのですが…。

いまから考えると、この教授法にはかなり問題があります。他人の作ったドイツ語のテキストを勝手に英語にしてですね、しかも内容を変えしまっているからです。しかし、そこはまあ、むかしのことです。ドイツ系の子どもたちにそうやって唱歌を教えると、当然、非常に受けが良いのです。こうしてメーソンは名をあげまして、シンシナティからボストンの師範学校に招かれる、という流れになります。

そのボストンに留学したのが、伊沢修二なんですね。伊沢は非常に優秀な学生でした。日本では師範学校の校長ですから、当然優秀なんですけれども…。しかし、どうしても音楽だけは苦手でした。それは当然です。洋楽を全く習ったことがないので、こればかりはどうしようもない。

ひとつの伝説が残っています。ボストンの師範学校の校長から「伊沢よ、君は音楽の勉強はもうしなくていい。免除します」といわれてしまったんだそうですね。邦楽と洋楽とでは音階からしてまるで違うので、「とても無理だ。諦めなさい」といわれたんですが、「いや、そういうわけにはいきません」といって頑張って勉強した — という話が流布しています。

かつてはそんなエピソードが信じられていたのですが、これはどうもおかしいのです。伊沢は国費留学生ですから、あらかじめ《これこれを勉強してきなさい》と、国から命令を受けているのですね。これも安田寛さんがお調べになって — 受け売りですが…。明治政府はですね、伊沢に《音楽を勉強してきなさい》と命令していたようです。政府の命令で留学したわけですから、不得意であったことは事実でしょうけれども、やらないわけにはいかないのです。それで音楽を、西洋式のドレミファをですね、特に半音階に困ったようなんですけれども、メーソンに付いて一所懸命に勉強しました。

ある時、メーソンが自分の教科書 — といっても本ではないんです、掛図なんですけど。教室の前に掛けて子どもに歌わせる掛図のなかから、ひとつの曲を選びまして、「これに日本語の歌詞を付けてみてはどうか」と、課題を出しました。そこで伊沢は考えます。「翻訳せよ」という課題ではありません。「いったいどんな歌詞をはめようか」と…。

思いついたのが、わらべ唄の「蝶々」なんですね。

ここで、時間的に前後しますが、伊沢が留学する前の話です。愛知県の師範学校の校長をしていた時にですね、野村秋足に「わらべ唄を集めるように」と命令しました。本来、野村は国学者です。だから慣れない仕事だったと思うんですけども、一所懸命に採集しました。そのなかに名古屋の近郊で歌われていたわらべ唄がありました。それがわらべ唄「蝶々」だったのです。

伊沢はそのことを思い出しまして、試しに野村の「蝶々」をメーソンから示された楽譜の旋律にはめてみたんですね。偶然にも — と、この辺のところはね、なかなか微妙なんです、本当は…。一応、こんなふうに伝えられています。「偶然にもピタリはまった」と。ちょっと考えにくいんですが、まあピタリはまった。多少は変えたのかも知れませんがね — と、これはわたしの想像です。こうして唱歌「蝶々」が誕生しました。このように日本の最初の唱歌は、外国由来のメロディにですね、日本語の歌詞を当てはめる — いわば、はめこみ歌なんですよ。そういう歌として始まりました。ですから、日本人にとって随分馴染みの深い歌が、外国ではまるで別の歌詞で歌われている、という例がいっぱいあるわけです。

時間があれば、そういう例をいくつかあげようと思っていたのですが、時間がありません。じゃあ、ひとつだけ聞いてみましょう。日本人には、非常に馴染みの深い曲です。ただし、歌詞はほとんど馴染みがないと思うんですが、年配のかたはご存じかもしれませんね。恐れ入りますが2曲目を流してください。1番だけで結構です。

(音楽流れる)

見わたせば、あおやなぎ  
花桜、こきまぜて、  
みやこには、みちもせに  
春の錦をぞ。  
さおひめの、おりなして、  
ふるあめに、そめにける。

この歌なんです、タイトルを「見わたせば」といいます。歌詞は別にしましてね。「あれ？」とお気づきじゃないですか。わたしどもの岡崎女子短大幼児教育学科に縁の深いメロディです。いまでも、幼児教育はすっかりおなじみの歌です。そう、「むすんでひらいて」ですね。

「見わたせば」の歌が「むすんでひらいて」になるのはかなり後です。いつ誰が作ったのか正確には分かりませんが、明治40年代の幼児教育の本に出てきます。ところが、いま流れた唱歌の発表は明治14年のことです。当時は全く違う歌詞をはめておりました。話しが長くなるので早々に切りあげておきますが、お配りしてある資料にありますように、この歌詞の出典は古今集なんですよ。これも「あれ？」という気がするかもしれません。「小さい子どもに古今集を教えるか？」と。確かに、あまりにも難しいんですけど…。

「見わたせば」はひとつの例としてあげておきましたが、このメロディはドイツ由来

じゃないんですね。いろいろ調べてみるとフランス由来なんです。けれども、これもやっぱり同じ経過で、メーソンが自分の教科書に載せています。もとは讃美歌なんですけれどもね。讃美歌として歌われていたものを自分の教科書に載せました。更に、このメロディに日本語の歌詞をはめこんで学校教育で使うという経緯を辿っているわけです。こうして、「むすんでひらいて」のメロディもメーソンが日本に持ち込んだんです。そして、伊沢修二というプロデューサーといいますがね、そういう立場の人が間に立っていたのです。

ちょっと脇道にそれてきましたので、話をもとへ戻します。

### 3. 岡崎発の「蝶々」

さて、唱歌「蝶々」です。いつまで経っても岡崎の話が出てきませんね。でも、これから出てきますので...

では、唱歌「蝶々」の歌詞に注目してみたいと思います。

お手もとの資料をご覧ください。これはお亡くなりになりました金田一春彦さんがお書きになった文章です。読みあげる暇がありませんので、要点だけ申しあげますとね。

そもそも唱歌「蝶々」という歌は変だといわれている。なぜか？ 蝶々が好きなのは「菜の花」ですよ。それがどうして「菜の葉」なのか、という疑問がある、と。これは拍数の問題だ。「菜の花」じゃあ1拍多いので、ここでは「菜の葉」というふうにしたんだ、と。そういえば後半のほうもですね、「桜のはなの、さかゆる御代に」とあります。さて？ この蝶々はどう考えても菜の花に飛んでる蝶々なので、モンシロチョウです。モンシロチョウは「桜のはな」ととまるんだらうかな？ そういう疑問もある、と。

金田一さんが書いておられるなかで、もうひとつはですね、藤田圭雄(たまお)さんのご意見です。藤田さんも、もうお亡くなりになりました。童謡研究者として、また童謡詩人として活躍なさいましたが...。この藤田さんがですね。金田一さんに、唱歌「蝶々」のもと歌は東京附近で歌われていたわらべ唄だ、とおっしゃっていたのです。

この2つが、金田一さんの文章の要点です。

まず、最初の「菜の葉にとまれ」について...

確かに普通考えると変なんですけれども、実は江戸時代の俳諧に「てふてふは菜の葉にとまり」と、ちゃんとあるんです。発想は江戸時代にもあった、ということですね。

それから、東京附近で歌われていたわらべ唄についてです。類似のわらべ唄はあちらこちらの地方でいろんな形のものが残っています。しかし、お手もとの資料をご覧くださいいんですけれども、わらべ唄でも「菜の葉」になっています。

ちょっと読みます。「蝶々ばっこ 蝶々ばっこ 菜の葉に止まれ 菜の葉がいやなら桜に止まれ」と、わらべ唄「蝶々」の別バージョンですね。「蝶々ばっこ」の「ばっこ」は「ひるこ」のなまりでしょう。「ひるこ」は毛虫ですね。毛虫が成長すると蝶になる。《空飛ぶひるこ》だからというので、「あまびるこ」といいます。「ひるこ」は大和言葉で、「蝶」は漢語です。したがって、もとは「ひるこ」といっていたものが訛って「ばっこ」になったのではないか、といわれています。普通はわらべ唄にタイトルはないの

で、このわらべ歌を仮に「蝶々ばっこ」と呼んでいますが、いろいろ形を変えて全国各地で歌われていたんですね。このように「菜の葉に止まれ」「桜に止まれ」という発想自体は、わらべ唄の世界にちゃんとあるんです。そういうことを引き継いで、唱歌「蝶々」が生まれたというように考えて良いと思います。

なお、これは余談ですが、モンシロチョウは桜に止まるか、という疑問についてですが...。モンシロチョウは桜に止まります。ええ、止まるんです。なぜ止まるかという理由を、はじめのほうでお話したテレビ番組で、動物学者が話していました。実際に桜の花に止まる映像もありましたが、これは別の話ですから、このあたりでやめます。

ということで、「菜の花」を「菜の葉」にする。それから「菜の葉」が嫌なら「桜に止まれ」という発想。これらは、わらべ唄の世界に見られる発想だ、ということが分かります。

さらに、江戸時代の行智という人が著した書物に、わらべ唄集『童謡古謡』があります。そもそもこの「蝶々」というわらべ唄、さほど古いものではないのです。なぜかという、菜の花を栽培するのは、ナタネ油を採るためです。ナタネ油は天ぷら用ではなく、灯り用ですね。灯りをとるために油が必要なんです。そのため、換金作物として全国的に菜の花が栽培されますが、一般化するのには江戸時代のなかごろ以降のことです。菜の花の咲き乱れる情景を歌ったわらべ唄は、これ以前にはありようがない。だから、これは江戸時代のなかごろ以降に生まれた、と考えると良いわけです。

どういうメロディで歌ったのかは、残念ながら分かりません。歌詞は「蝶々とまれ、菜の葉にとまれ、菜の葉がいやなら手にとまれ」です。桜じゃあないんですね。そして、「手にとまれ」という歌詞でした。この『童謡古謡』には、いろんな童謡が入っています。例えば「うさぎ うさぎ 何見て跳ねる」という有名なものがある。そのなかのひとつが、わらべ唄「蝶々」なんですけれども...

もう少し古い文献を調べてみますと、こんなものもあります。「松ノ葉カイヤナラ木ニトマレ」とかね。どうも後半部分は、何らかの理由でもとの歌に付け加えられたようなんです。なぜか前半の「蝶々とまれ 菜の葉にとまれ」の部分はほぼ共通で、後半のほうは「菜の葉がいやなら手にとまれ」とか「この葉にとまれ」と、いろんなバリエーションがあります。

比較的最近になって愛知県の一宮で採取された童謡は、歌い手はもう亡くなりましたが、こんな歌詞でした。「ちょうよとまれ 菜の葉にとまれ 菜のはいやなら 木の葉にとまれ」です。こういうわらべ唄が、つい最近まで歌われていたわけですね。この種のわらべ唄を聴いてですね、先ほどお話をしました野村秋足が文字に書き留めたのです。少し脚色したかもしれませんが...

ある名古屋の郷土史家が、おもしろいことをおっしゃっていらしてね。「菜の葉にあいたら」の「あいたら」は名古屋弁だ、と — わたしは関西の人間ですので、正確に発音することができません。三河と尾張でも言葉が違います。間違っていたらすみません — 「菜の葉にあいたら」の《えーたりゃー》がね、実は名古屋弁なんだ、と。野村秋足は名古屋の人ですので、話としては大変おもしろいんですけども、ちょっと違うような気がするんですね。それは古い文献にはっきりと「いやなら」と書いてあるか

らです。野村は国学者ですから、古典の素養が深いのです。「いやなら」を文語の「あいたら」に置き換えた、と考えるほうが普通だろうと思うんです。

さて、いよいよこれから先が岡崎に縁が深くなっていきます。もうあと20分しか残っていないので先を急ぎます。お手もとの資料をご覧ください。

やはり江戸時代の文献に、栗田維良という人の著したわらべ唄集『弄鳩秘抄』があります。読みかたが難しいですが、「ろうきゅうひしょう」です。ここにですね、大変おもしろいことが載っています。それは何かというと、「菜の葉がいやなら手にとまれといふは、後につくりて、岡崎女郎衆に合せたるなり」という記述です。つまり、この歌の後半部分は後からつくった。そして、岡崎女郎衆に合わせたんだ、と書いてあるのです。この意味が、おわかりですか？

ここでいう岡崎女郎衆は、岡崎の遊女たちのことを直接的に指しているのではありません。江戸時代に大変流行った俗謡「岡崎女郎衆」に合わせて歌った、という意味なのです。この俗謡は非常に単純な歌詞です。「おかざき じょうしゅー おかざきじょうしゅー おかざきじょうしゅは よいじょうしゅう」というもの。単純でありながら、岡崎女郎の何が良いのかさっぱり分からない。何とも不思議な味わいのある歌です。

ご存じのことと思いますが、旧東海道沿いには大規模な遊女街を抱えた宿場がふたつありました。ひとつはいまの静岡県の三島宿です。三島宿の遊女たちを三島女郎衆といいます。もうひとつは岡崎宿ですね。岡崎宿の遊女たちが岡崎女郎衆です。ところが、三島や岡崎の遊女街は幕府公認の遊郭ではありません。この手の遊女街のことを江戸では岡場所と呼んでいますが、表向きには遊女を置いているのではなく、飯盛女(めしもりおんな)を雇っている、ということになっています。飯盛女は、お給仕やその他の雑用をする女性のことです。もちろん、実態は違うんですよ。江戸時代の岡崎宿には、旅人を相手に色を売る大勢の飯盛女たちがいました。俗謡の「岡崎女郎衆」は、そういう飯盛女たちのことを歌っているのです。

なお、この歌はですね。門付けの警女歌(ごぜうた)として歌い広められたんだらうと思いますが、のちにはもう少し上品な名前に変わりました。それが「岡崎」です。もっとも、これには歌詞がありません。メロディだけです。

「岡崎」という曲の名を、どこかでお聞きになったことはありませんか？

例えば、お琴の入門曲がありますね。琴を弾く技術を習得するうえで基本的な曲目なんですけれども…。これを箏曲「岡崎」といいます。それから、皆さまがたのなかに、お神楽に関係のあるかたがいらっしやいませんか？ お神楽に「岡崎」がありますよね。神楽で「岡崎」が奏されるのは、三河地方だけではなく、広く全国的に行われています。

さて、『弄鳩秘抄』には、このメロディに合わせて「蝶々とまれ、菜の葉にとまれ、菜の葉がいやなら手にとまれ」の後半部分を歌った、と書いてあるわけですね。それでは、ちょっとメロディだけをですね。恐れ入ります、3番目の曲です。

(メロディ流れる。)



はい、ありがとうございました。「おかざきじょろしゅは よいじょろしゅう」という部分をですね、「なのはがいやなら てにとまれ」に変えて歌うと、完璧に歌えます。江戸時代の文献に、はっきりそう書いてあるんです。

俗謡「岡崎女郎衆」は、江戸時代に大流行した歌なんですよ。だから、いろんな芸能に取り入れられています。そういうわけで、「なのはがいやなら てにとまれ」のわらべ唄のメロディが俗謡「おかざきじょろしゅは よいじょろしゅう」からの借り物だということは、みんなが知っているわけです。おとなたちも知っていますし、おそらくわらべ唄を歌っていた子どもたち自身も知っていたと思いますよ。おとなたちが歌いますからね、これを。ひょっとすると、子どもたち自身も「なのはがいやなら てにとまれ」ではなくて「おかざきじょろしゅは よいじょろしゅう」と、おもしろおかしく歌うこともあったのではないのでしょうか。少なくとも知っていたに違いない、と思います。

わらべ唄「蝶々」の歌詞自体は、まことに無邪気な堅気の歌詞です。「蝶々とまれ、菜の葉にとまれ、菜の葉がいやなら手にとまれ」と、子どもたちの気持ちを素直に表現しています。しかし、これをですね。「おかざきじょろしゅは よいじょろしゅう」という俗謡のメロディに合わせて歌うと、まったく違う意味に聞こえてきます。最初、誰がどういう意図でわらべ唄「蝶々」を創ったかはわかりません。けれども、わらべ唄と俗謡のふたつを重ね合わせて聴いてみますと、大変、気の毒な身の上の女性たちのイメージが浮かびあがってきます。彼女たちは身柄を拘束されている飯盛女たちです。自由に歩くことはできません。蝶々は花から花へ自由に飛んでいくことができる。だけど、自分たちはできない。だから、「蝶々たちよ、菜の葉がいやならせめてこの手にとまっておくれ」という魂の叫びが聞こえてくるようです。

もともと文学作品とはそういうものです。それが本来、どういう意味で創られたかは別にしてですね。岡崎宿の飯盛女たちのイメージと重ねてみると、やっぱり実に悲しい歌に聞こえてくるんですよ。

遊女と関係があるわらべ唄は、何も「蝶々」に限ったことではありません。かなりあるんです。その手のわらべ唄のなかで一番有名なものはですね。誰でも知っていると思うんですが…。恐れ入ります、4曲めをかけていただけますか。聴けばすぐにおわかりになるはずですよ。

(音楽流れる)

かごめ かごめ 籠の中の鳥は  
いつ いつ でやる 夜明けの晩に  
鶴と亀が出会うた 後ろの正面だあれ

伝承わらべ唄ですので、地域によって歌詞は少しずつ違います。「鶴と亀が滑った」というようにも歌います。メロディも少し違いますが、基本はだいたいこんなものです。

柳田国男は「かごめ かごめ」は「かがめ かがめ」の訛りだ、とっていますが、この解釈は今日では少数派です。今日の多数派は「かごめ かごめ」は「かこめ かこめ」だ、という解釈です。そして、「籠の中の鳥」は遊女だ、と。だとすると、この歌

も実に悲しい歌ですね。「いついつでやる」は、いつ出られるのかという意味。古くは「鶴と亀が滑った」ではなく、「つるつるつっぺいた」と歌いました。「つっぺいる」とは、無理矢理に押し入るという意味です。そんなふうに困まれた所に入っていったよ、という意味なんですね。そして、いついつ出られるんだろうか、と。

わらべ唄というものは、無邪気な子どもたちが深い意味も考えずに歌うものです。けれども、それを聞いているおとなたちには、非常に深い意味の歌に聞こえることがあります。だとすれば、「蝶々とまれ 菜の葉にとまれ 菜の葉がいやなら手にとまれ」も、おとなたちは非常に悲しい歌だと受け止めることがあったんだろうな、と思います。

そろそろ、この講演をまとめなくてはなりません。

こうしてみますと、わらべ唄の「蝶々」は江戸時代の人びとには岡崎とお女郎さんに縁のある歌だと認識されていた、と解釈しても、それほど的外れではないでしょう。「岡崎で生まれた」とまでは申しませんが、おそらく三河、尾張。この辺りを中心に各地へ広まっていったわらべ唄であったような気がします。まだ学問的に確定するところまではいきませんが、いろいろ古い文献から見て、そのように想像するのが一番適当なのではないかな、と思います。

そんなわらべ唄が、明治の初めごろ、野村秋足によって、この西三河の地からほど近い、尾張名古屋地域で採集されました。類似のわらべ唄は全国的広くに分布していますが、少なくとも唱歌「蝶々」に発展していくバージョンのわらべ唄の起源については、だいたい本日お話ししたようなものだったろう、と想像できます。

しかしながら、文部省唱歌 — 旧文部省が作った学校唱歌をそのように呼びます。明治のころの文部省唱歌は、残念ながら洋楽一辺倒なんですね。ですから、「菜の葉にあいたら 手にとまれ」というわらべ唄の音階 — これを陰音階といいます。日本の伝統的な音階です。文部省唱歌は、わらべ唄の陰音階を採用しませんでした。そのかわり、完璧な西洋音楽のメロディを借用して、そこにわらべ唄の歌詞をはめこみました。明治のころには、伝統的な邦楽は価値が低いから、とにかく新しい西洋のものを学ばせよう、という発想がありました。洋楽こそが新しく、文明開化の御代に必要で尊いものだ、という抜きがたい意識があったのです。

例えば「茶摘み唄」です。「夏も近づく八十八夜」というあの歌は、民謡のなかでも労働歌といわれるもののひとつです。文部省唱歌の「茶摘」では、歌詞は京都の宇治田原に伝わる「茶摘み歌」を基本にしました。けれども、メロディは西洋音楽なんですね。

ただ、ごくごく例外的なことですが、一部の学校唱歌は邦楽のメロディです。例えば「さくら さくら」は陰音階ですね。そんなごく少数の例を除いて、ほぼ全ての唱歌は洋楽のメロディに日本語の歌詞をはめこんだのです。

というような流れのなかで、唱歌「蝶々」では岡崎との接点がなくなってしまいました。箏曲やお神楽などに使用されている陰音階のメロディからすっかり離れて、西洋伝来のメロディの唱歌として創りかえられてしまいました。

もっとも、先ほどお話ししました一宮で採集されたわらべ唄は「岡崎女郎衆」のメロディではありません。そのあたりがまた面白いですところですが、これは別の話です。お話しできる時間は、もう残っていません。

このように、日本の近代の学校唱歌はわらべ唄を含む邦楽の伝統から断絶したところで創られていった。それはたいへん残念なことであった、ということが本日のお話の結論であります。

本日の講演では、ほんの少しだけ岡崎とかすりしました。それでも、「岡崎女郎衆」のくだりは、かなり大胆な仮説なんです。実はわたし、創元社から『名作童謡ふしぎ物語』という本を出しました。そして、この本のなかで、本日お話ししたことの一部をやや挑発的に書きました。童謡やわらべ唄に関心のある人たちを挑発してみたつもりだったのですが、残念ながら誰も挑発にのってきません。そこで本日は、わたしなりの仮説を皆さまがたにお聞きいただいた次第です。